

# 日中指示詞の対照研究

## —現場指示における「コ・ソ・ア」と「这・那」—

郭 玉 英

### [要旨]

本稿では、指示詞の用法のうち「現場指示」用法について、日本語の「コ・ソ・ア」と中国語の「这・那」を比較対照する。まず日本語の指示詞について先行研究を確認した後、本稿での仮説を提案する。次に、その結果を中国語指示詞と比較し、指示詞領域の決定要因を検討した上で、日中指示詞の相違点を明らかにする。

**【キーワード：現場指示、話し手、個人領域、会話領域、指示詞の決定要因】**

## 1 先行研究

指示詞の現場指示とは、基本的には、対話・講演など話し手と聞き手が同一空間を共有する場面において、指示対象が五感で認識可能な場合の指示をいう。

コ・ソ・アの指示領域については、これまで数多くの議論がなされてきたが、そのほとんどは「距離区分説」と「人称区分説」に分けることができる。

- (a) 距離区分説：「近称・中称・遠称」という用語を用い、コソアを話し手から対象までの距離によって性格付ける捉え方。
- (b) 人称区分説：「自称・対称・他称」という用語を用い、話し手と聞き手のなわばり関係によって性格付ける捉え方。

「なわばり」という捉え方が現れた後、指示詞「コソア」の研究は大きく進展した（高橋・鈴木 1982；金水・田窪 1992）。その後の研究の流れには、従来の「距離区分説」と「人称区分説」とをなんらかの形で両立あるいは混在させるという特徴がある。つまり、日本語の指示詞の研究においては、距離区分説に基づく検討（坂田 1971 など）から、聞き手という概念の導入を通じて、日本語の特徴を取り入れた「人称区分説」に基づく検討（久野

1973; 三上 1955 など) へと転換し、両説を統合した見方による議論 (正保 1981; 吉本 1986 など) がその後の研究では主流となっている。また、金水・田窪 (1990) 以来、談話管理理論に基づいた日本語の指示詞への検討が行われ、日本語で構築された仮説の一般化を目指すために、他言語の指示詞との対照研究も多く行われている。

## 2 問題提起

コソアの使い分けについては、佐久間の人称区分説は今日に至るまで定説となっている。それによると、コは話し手のなわばり、ソは聞き手のなわばり、アはそれ以外の範囲にある事物を指示するということになるが、ソについては問題がある。ソ系指示詞には、例(1)のような所謂「聞き手領域」に属する指示対象を指示する機能のほか、例(2)のように「聞き手領域」にも「話し手領域」にも存在しない指示対象を指示する機能もあるからである。

- (1) 女房：ねえ、来てみて！（相手に気づかせて）これ、何かしら。  
主人：それ、ゴキブリだよ。 (李 1994)
- (2) 「おでかけですか」  
「ええ、ちょっとそこまで」 (金水・田窪 2000)

ソについては聞き手のなわばりにないはずの事物を指示できるということは、多くの研究者によって指摘されているところである。まず高橋 (1956) は次のように述べている。

話し手と聞き手が部屋の中で立ち話しをしている時、話し手が手を後へやって机を指し、「その机をごらん」という場合を例にとると、距離においても方向においても話し手の側にあるものがソ系で発言されることになる。 (高橋 1956:56)

また、坂田 (1971)、堀口 (1978)、正保 (1981) にも反例を挙げ、「ソ系で指示表現する対象は聞き手の領域内のものである」ということは正しくないと主張している。

- (3) 乗 客：そこの煉瓦色の建物の前で止めてくれ。  
運転手：そこの大きな建物ですね？ (正保 1981)

このようにソの指示対象は必ずしも聞き手のなわばり内に限られないのだが、ソの使用自体は聞き手の存在を前提とする。これは、独り言ではソが使われないことから明らかである（黒田 1979 など）。また、幼児の言葉にソが現れない事実も、幼児に社会的関心が欠如しているからであるとされた（佐久間 1951）。

以上の点を踏まえて、吉本（1992）にならい、現場指示のコソアの使い分けには話し手の「個人空間」、話し手と聞き手を含む「会話空間」という二つの領域が必要であると考えられる。本論文では、日本語の指示詞を次のようにまとめることとする。

コ：話し手（S）の個人領域内にある事物を指す

ソ：話し手（S）と聞き手（H）を含む会話領域内にある事物を指す

ア：会話領域内から、領域外にある事物を指す

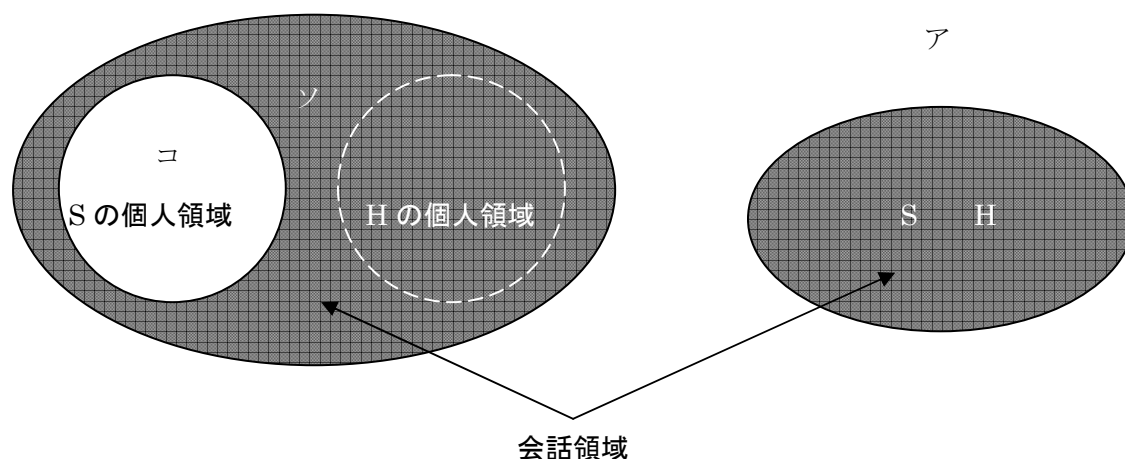


図1 コソアの指示用法

コ系が話し手の領域(なわ張り)にある事物を指すことについては問題がないであろう。なお、話し手の個人領域は会話領域に含まれるが、この場合は話し手の個人領域であることが優先され、コが選ばれる。

ソ系が話し手と聞き手を含む領域にある事物を指すことにより、ソで指示される事物が必ずしも聞き手の領域にある必要がないことも示すことができる。また、領域に個人領域内・会話領域内・会話領域外の三つを設定することにより、ソの「中称」性も表すことが可能となる。さらに、会話領域には聞き手がいることから、聞き手の存在が間接的に指示詞の選択に影響を及ぼすことが示される。なお、話し手と聞き手が同一である独り

言においては、会話空間と話し手の個人空間が一致することになる。上述の通り、個人領域と会話領域が重なるときは個人領域が優先されるのであるから、当然、ソが現れることはない。

ア系は会話領域外にある事物を指す。この時、話し手や聞き手の個人領域は意味を持たない。話し手と聞き手は同じ会話領域内から領域外の事物を見ればよいのである。ソ系が領域を共有するとすれば、ア系は視点を共有すると言える。

次節では領域を決定する諸要因について検討することにしよう。

### 3 指示詞の日中対照と決定要因

この節では、先行研究で提案された指示詞選択の基準、すなわち「話し手の領域」と「会話領域」を決定する要因について、「コ・ソ・ア」と中国語の指示詞「这・那」とを対照させながら考察する。3.1 節では物理的距離、3.2 節では操作可能性、3.3 節では所有・所属関係、3.4 節では心理的距離について述べる。

#### 3.1 コントロール・直接接触

これまでの指示詞研究では、話し手・聞き手からの相対的距離が指示詞の選択基準となっていた。Hanks (1990 : 401) は指示のフレームが絶対的距離ではなくて、「この地球」のように拡張したり、「この指先」のように縮小したりする相対的なものであると指摘している。それ以外の要因としては、指示対象の相対的サイズが指摘されている。指示対象の相対的サイズとは、相対的に遠いものでも、相対的に大きなものは、話し手の領域指示詞が使われることである。例えば、大きなビルの手前に自転車があった場合、自転車を「あの」で、自転車よりも相対的に遠くのビルを「この」で指すことがありうる。これも広い意味では、「相対的距離」と捉えることができる。

これに対して Imai (今井) (2003a,b,c) は、話し手の領域を決定づける要因としては「相対的距離」よりも「コントロール」の概念の方が重要であるとする。彼による「コントロール」の概念は、「直接接触」「間接接触」「(非接触) 間接コントロール」に下位分類される。「直接接触」とは、手で指示対象を直接接触する場合、「間接接触」とは、釣り竿のような長い道具で遠い指示対象に触れる場合、「間接コントロール」とは、遠くにあるコップに結びつけられたひもを手前に引っ張るような場合で、この順にコントロール性が低くなる。

今井によれば、彼の調査した 11 言語すべてにおいて、直接接触では近称指示詞が用いら

れ、「間接接触」および「間接コントロール」では近称指示詞とともに非近称指示詞が用いられたという。

ここで、日本語に関する今井の実験を紹介する。この実験では、縦 60cm×横 75cm のテーブルに、高さ 8cm のコップをおいて、話し手にそのコップあるいはコップの位置を、指示詞を使って指し示してもらってデータを収集している。

まず、調査者が話し手のすぐ後ろに立っている場合、次の結果が得られている。ここで Spk は話し手が指示対象であるコップを手を持ってそれを指示して場合に使われた指示詞を、0cm は、コップをテーブルの話し手に近い縁に置いた場合に使われた指示詞を、160cm は、コップをテーブルの話し手から遠い縁に置いた場合に使われた指示詞を示している。

**表 1**

| Spk | 0cm | 40cm    | 80cm    | 120cm | 160cm |
|-----|-----|---------|---------|-------|-------|
| ko  | ko  | ko/so/a | ko/so/a | so/a  | so/a  |

(Imai 2003a:88)

つぎに、調査者 (Adr) がテーブルの反対側に立っている場合は、表 2 のようになり、話者と調査者を 4 メートル離れた場合は表 3 のようになった。

**表 2**

| Spk | 0cm | 40cm  | 80cm | 120cm | 160cm | Adr |
|-----|-----|-------|------|-------|-------|-----|
| ko  | ko  | ko/so | so/a | so/a  | so/a  | so  |

(Imai 2003a:88)

**表 3**

| -3m | -2m | -1m   | Spk | 1m    | 2m | 3m   | 4m/Adr | 5m   | 6m   | 7m   | 8m |
|-----|-----|-------|-----|-------|----|------|--------|------|------|------|----|
| a   | a   | so/ko | ko  | ko/so | so | so/a | so     | so/a | so/a | so/a | a  |

(Imai 2003a:88)

以上の実験結果から、Imai (2003a,c) は日本語話者は直接接触可能な領域にある対象をコで、話者から少し離れており、かつ聞き手の領域にある対象をソで、指示すると結論づけている。また、このように対象との距離の基準点が話し手の場合もあれば聞き手の場合

もあることから、日本語は dual-anchor system の言語であるという。

この結論を我々の仮説に当てはめると、個人領域の決定にはコントロールとくに直接接  
触の概念が有効であるということになる。

しかし、このような 1 次元的（線状）におかれた事物の指示実験から、3 次元（空間）  
的な指示を記述するのは多少無理があるように思われる。とりわけ上述の例文(2)(3)は、単  
に dual-anchor system というだけでは説明できない。

さらに、Hoji, Kinsui, Takubo and Ueyama (2003:125) が指摘するように、潜在的には  
世界中のあらゆる事物をコで指示することが可能で、たとえば、夜空の星を「この星」と  
することもできる。

また、今井の実験結果は我々の仮説でも説明可能である。第一に、話者の個人領域にあ  
る対象がコで指示されることには異論はない。ただし、個人領域が主観的に決まることを  
忘れてはならないだろう。第二に、話者の個人領域からははずれるが、話し手と聞き手を  
含む会話領域にはあると判断されればソが、会話領域からもはずれていると感じられれば  
アが使われる。ただし、ソかアかの判断、つまり会話領域にあるかどうかの判断は非常に  
主観的であり、ゆれがある。第三に、表 3 から分かるように、話し手と聞き手が向かい合  
っているとき、会話領域は二人の間に広がるため、話者の後ろは狭くなる。そのため、話  
者の前方 2 メートルの対象はソで指示されるのに対し、後方 2 メートルの対象はアで指示  
されることになるのである。

さて中国語については、Wu (2004) が今井と同様の実験を行っている。この実験では  
まず 12 個のジグソーパズルのピースに 1 から 12 までの番号を振り、それらを 2 インチ(約  
5 センチ) 間隔でテーブルに置く。つぎに話し手 A を 12 番のピースのそばに、聞き手 B  
を 1 番のピースのそばに立たせ、各ピースを指示する際に「这・那」どちらの指示詞が用  
いられるかを調べた。なお、実験の被験者は 9 歳から 13 歳の学童 8 人であった。結果は以  
下の通りである。

表 4

| 番号 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7      | 6      | 5      | 4      | 3 | 2 | 1 |
|----|----|----|----|---|---|--------|--------|--------|--------|---|---|---|
|    | 这  | 这  | 这  | 这 | 这 | 这<br>那 | 这<br>那 | 这<br>那 | 这<br>那 | 那 | 那 | 那 |

(Wu 2004:64)

Wu (2004) の実験からは、「这・那」の選択が話し手からの距離によって決まることが分かるが、聞き手の存在が影響を及ぼすのかが不明である。筆者は追加実験として、今井の手法に倣い、20名の中国語母語話者を被験者として実験を行った。その結果、聞き手（調査者）が話者の後ろにいる場合と正面にいる場合とで、ほぼ同じ使い分けがなされるというデータが得られた。

表5

| Spk | 0cm | 40cm | 80cm | 120cm | 160cm | (Adr) |
|-----|-----|------|------|-------|-------|-------|
| 这   | 这   | 这    | 这/那  | 那     | 那     | (那)   |

以上から、次の結論が得られる。日本語は空間を「話者の個人領域内」「会話領域内」「会話領域外」と3分割するのに対し、中国語は「話者の個人領域内」と「話者の個人領域外」にしか分割せず、前者にあれば「这」、後者にあれば「那」が用いられる。ただし、この領域分割は非常に主観的である。

### 3.2 操作可能性・行為の主体性

金水・田窪 (1990) は「相対的距離」よりも重要なパラメータのひとつとして、「操作可能性」というパラメータを提案しているが、その定義ははっきりしない。彼らの挙げている例で考えてみよう。

#### (4) 病院で

医者：(患者の腹部を押さえながら) ここ、痛みますか。

患者：そこは、それほどでもありません。

ここで、医者は患者の腹部に単に直接触れているだけではなく、触診という行為を行っており、患者の腹部が医師の個人領域にあることは問題ない。これに対して、患者は自分の腹部でありながら、「ソコ」と呼んでいるのは、診断行為の主体ではないため、自分の個人領域からはずさざるを得ないのであろう。

以上から、「操作可能性」を「行為の主体」であるかどうかという観点で捉えたい。すなわち、話し手がある事物に対する行為の主体であれば話者の個人領域に入り、そうでな

れば、たとえ自分の身体部位であったとしても、個人領域からはずれるのである。

ここで、中国語指示詞と比較してみよう。

(5) 母：ちょっと背中をかいてくれる？

子：どこがかゆいの？ ここ？

母：そう、{\*ここ/そこ}。

(井上 2002:20 ; 一部改変)

(6) 妈妈：给我挠一下后背呗。 「ちょっと背中をかいてくれる？」

儿子：哪儿痒啊？ 这儿？ 「どこがかゆいの？ ここ？」

妈妈：对，就 {这儿/那儿}。 「そう、{ここ/そこ}」

例(5)では、背中も母の体の一部であり、また母のほうがより近いにも関わらず、子は「コ」を用いている。それは、子は母の背中をかくという行為の主体であるため、指示対象は子の領域にあると見なされているからである。これに対し、母は行為の主体ではないので、指示対象を自分のものとせず、相手の領域に属する物と見なし、ソを用いる。

一方、(6)の中国語の場合、子が指示対象を自分の領域の物と見なして近称の「这」を用いるのは日本語と同じだが、母は遠称「那」だけではなく、「这」を用いることもできる。したがって、中国語では行為の主体であるかどうかとともに、距離も指示詞選択の重要なパラメータであると考えられる。

これを支持する証拠として、例文(7)(8)がある。(5)(6)と同一の状況で、話し手が背中に腕を回してかゆい場所を指す場合、日本語でも中国語でも近称の「コ」と「这」しか使えない。

(7) 母：ちょっと背中をかいてくれる？

子：どこがかゆいの？ ここ？

母：ちがう、{\*ここ/そこ} じゃない。

(背中に腕を回してかゆい場所を指さす) {ここ/\*そこよ、ここ/\*そこ}。

(井上 2002:20 ; 一部改変)

(8) 妈妈：给我挠一下后背呗。 「ちょっと背中をかいてくれる？」



|                   |                      |
|-------------------|----------------------|
| 儿子：哪儿痒啊？ 这儿？      | 「どこがかゆいの？ ここ？」       |
| 妈妈：不对，不是 {这儿/那儿}。 | 「ちがう、{*ここ/そこ} じゃない。」 |
| (把胳膊弯到背后指着痒处)     | (背中に腕を回してかゆい場所を指さす)  |
| {这儿/*那儿，这儿/*那儿}。  | {*ここ/*そこよ，ここ/*そこ}。」  |

日本語でも中国語でも、母親は指さし行為についてはその行為主体であり、かつ自分からも近いために、「ソ」や遠称の「那」が選ばれる余地はないのである。

### 3.3 所有・所属関係

金水・田窪 (1990) は所有・所属関係も指示詞選択に影響を与えるとして、次の例を挙げている。

- (9) (話し手から2メートルくらい離れたところで、話し手の妻が、幼児を抱いているとする。その妻に夫が話しかける。)

夫：{この/その子}、おまえとよく似ているね。

この例に関しては、「指示対象が二人の間にできた子供であるなら、「この」しか使用することできない。しかし、例えば夫にとって見知らぬ子供であったら、逆にソの使用が優先されるはずである」としている。

しかし、自分の所有物であればすべて「コ」で指示できるわけではない。

- (10) a. 杨彩玉：(从床上拎起一件衣服) 衣服脱了也不好好挂起来，往床上一扔，十二岁啦，自己的身体管不周全，还叫别人，做什么‘小先生’!

葆 珍：(将书本收拾) 这件要洗啦! (夏衍『上海屋檐下』)

- b. 杨彩玉：(ベッドから服を拾い上げて) 服を脱いでもきちんと掛けておかないで、ベッドにポイ。十二にもなって、自分の身の回りのこともきちんとできないで、そのくせ、ひとに勉強を教えたりして、「ちびっ子先生」だのなんだのって!

葆 珍：(本を片付けながら) それ洗うのよ! (木村 1992)

この例文では、中国語においては、指示対象がより聞き手に近いにも関わらず、自分の所有物として近称の「这」を用いている。一方、日本語においては、自分の所有物であるものの、ソが使われている。この違いはどう説明できるであろうか。

ひとつには、日本語の場合、単に所有しているかどうかよりも、譲渡可能 (alienable) かどうかが重要で、譲渡不可能であれば話し手の個人領域に入りやすいと言えるだろう。これに対して中国語は「所属・所有」関係が成り立てば、話者の領域に入れることができると考えられる。

### 3.4 聞き手との関係

中国語の指示詞選択においては「会話領域」が考慮されないので、(3)に相当する中国語で現れる指示詞は「那」である。

- (11) 乗客：請給我停在那个砖色楼房前边。「そこの煉瓦色の建物の前で止めてくれ。」  
運転手：那个大楼吧？ 「そこの大きな建物ですね？」

(外山 1994)

上に見てきたように、中国語は、特定の指示詞によって聞き手の領域を独自に示すといった方略は持たないし、指示詞運用の際に聞き手の存在が考慮されない。しかし、外山 (1994) は次の例を挙げ、聞き手の領域を認める場合もあると主張している。

- (12) (話しに夢中なあまり、部下の箸を使って食事をしている課長に対し)  
「それは、私のなのですが」

「那是我的」

(外山 1994)

この場合は、部下は箸がごく近くにあるにも関わらず、「ソ」と「那」を使っている。この場合、話し手 (部下) が、箸は聞き手 (課長) の領域 (課長の手の中) にあると感じていれば「那」が現れ、話し手が箸を指しながら、「これは私のなのですが」と言えば「这」が用いられる。この例を見る限り、中国語の指示詞も一部聞き手の領域を認めている場合もあるように思われるかもしれない。しかしこの場合も、結局は、箸が他人に使われているために自分の領域にないと判断すれば「那」が現れると言うことであって、必ずしも、

聞き手の領域を考慮に入れると考える必要はない。

では次の例はどうであろうか。

(13) (学生ラウンジで、甲、乙並んでソファに座って遠く離れているテレビを見ている)

a. 甲：あのテレビ大きいね、こんなに離れていても、画面がはっきり見える。

乙：そうだね、あの大きさにちょうどいいわ。

b. 甲：这电视真大，离这么远也能看得清清楚楚。

乙：可不，{这么/? 那么}大的正好。

(高 2001:190)

木村（1992）によれば、中国語では、包合的視点（聞き手が話し手自身と共有の場にあると意識された視点）と、対立的視点（聞き手が話し手とは非共有の場にあると意識された視点）という二つの視点がある。包合的視点で物事を指す場合、中国語では遠くにあるものを目の前に持ってきて、「这」を用いて話題とする傾向があるが、日本語では会話領域外にあればア系で指示されるのである。

#### 4 まとめ

現場指示における日本語と中国語指示詞の特徴をまとめると次のようになる。

コ：話し手（S）の個人領域内にある事物を指す。

ソ：話し手（S）と聞き手（H）を含む会話領域内にある事物を指す。指示される事物が聞き手の領域にある必要はない。

ア：会話領域内から、領域外にある事物を指す。話し手や聞き手の個人領域は意味を持たない。

这：空間的・心理的に話し手の個人領域内にある事物を指す。

那：空間的・心理的に話し手の個人領域外にある事物を指す。

どの領域にあると判断されるかは非常に主観的で、さまざまな要因によるが、日本語・中国語ともに、次の場合には話し手の個人領域に含まれやすい。

1. 対象に直接接触できる。
2. 話し手が対象になんらかの行為を行う主体である。
3. 日本語では対象が話し手の譲渡不可能な所有物であるとき、中国語では所属・所有関係にあるとき。

中国語ではこれに加えて、次の場合も含まれる。

4. 包合的視点（聞き手が話し手自身と共有の場にあると意識された視点）で対象を見るとき。

## 5 今後の課題

本稿では、現場指示用法を取り上げ、日本語と中国語との比較対照研究を試みた。しかし、中国語指示詞では、領域の決定要因に不明な点が残っており、まだはっきりとはしていない。また、本稿のモデルによる文脈指示の説明や指示詞の使い分けも今後の課題にしたい。

### 「注」

- <sup>1</sup> 今井の「コントロール／直接接触」の概念は、金水・田窪（1990）における「操作可能性」に非常によく似ているように思われるが、Imai/今井（2003a, b, c）の参考文献に金水らの研究は挙げられていない。

### 「参考文献」

- 井上 優（2002）『日本語文法のしくみ』研究社。
- 今井新悟（2003a）「指示詞領域の決定要因」『日本認知言語学会論文集』第3巻. 204-214。
- 久野 暁（1973）『日本文法研究』大修館書店。
- 黒田成幸（1979）「(コ)・ソ・アについて」『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』く

- ろしお出版, 41-59.
- 木村英樹 (1992) 「中国語指示詞の「遠近」対立について: 「コソア」との対照を兼ねて」大河内康憲 (編) 『日本語と中国語の対照研究論文集 (上)』くろしお出版. 181-211.
- 金水 敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3 (日本認知科学会) 講談社, 85-115.
- 金水 敏・田窪行則 (1992) 「日本語指示詞研究史から/へ」『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房, 151-192.
- 高 革萍 (2001) 「日本語教育における指示詞について—中国人学習者の場合」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』47, 189-192.
- 阪田雪子 (1971) 「指示語『コ・ソ・ア』の機能について」『東京外国大学論集』21, 125-138.
- 佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法 (改定版)』くろしお出版より復刊(1983) 2-43.
- 正保 勇 (1981) 「『コソア』の体系」『日本語の指示詞』〈日本語教育指導参考書 8〉(国立国語研究所) 51-122.
- 外山美佐 (1994) 「日、中両語における指示詞の比較について」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』9, 1-18.
- 高橋太郎 (1956) 「『場面』と『場』」『国語国文』25(9), 52-61.
- 高橋太郎・鈴木美都代 (1982) 「コ・ソ・アの指示領域について」『研究報告集』3〈国立国語研究所報告集 71〉1-44.
- 田窪行則・金水 敏 (2000) 「複数の心的領域による談話管理」坂原 茂 (編) 『認知言語学の発展』ひつじ書房. 251-280.
- 堀口和吉 (1978) 「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8 (大阪外国語大学) 23-44.
- 三上 章 (1955) 『現代語法新説』刀江書院 (くろしお出版より復刊, 1972) 170-189.
- 吉本 啓 (1992) 「日本語の指示詞コソアの体系」『日本語研究資料集 指示詞』ひつじ書房 105-122.
- 李 長波 (1994) 「指示詞の機能と『コ・ソ・ア』の選択関係について」『国語国文』63(5) 37-54.
- Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo, and Ayumi Ueyama (2003) “The demonstratives in Modern Japanese”, Yen-hui Audrey Li and Andrew Simpson (eds) *Functional Structure(s), Form and interpretation: Perspectives from East Asian Languages*. London; Routledge. 97-128.
- Imai, Shingo. (2003b) *Spatial Deixis*. Ph.D. Dissertation, State University of New York at

Buffalo.

Imai, Shingo. (2003c) "Spatial deixis in Korean and Japanese: addressee-anchor isolated system versus dual-anchor system". *Japanese Korean Linguistics* 12, edited by William McClure, Stanford, California; CSLI Publications, pp.340-351.

Yoshimoto, Kei (1986) "On demonstratives KO/SO/A in Japanese" 『言語研究』 90, 48-72.

Wu, Yi'an. (2004) *Spatial Demonstratives in English and Chinese*. Amsterdam; John Benjamins.

---